ブルースリー物語　その４

帯広市医師会
帯広中央病院
吉田（よしだ）　貢（みつぐ）

ブルースリーはウォン・ジャックマンと対峙するも相手は攻めてこない。太極拳は、目にも留まらぬ速さで攻めてくる相手の技を制するため、目に頼らない「推手」という訓練法を開発し、相手と接触した部分（腕が多い）から伝わる感覚で相手の動きを察知し、その動きを制してしまう。

よって太極拳の使い手が相手の場合、十分に間合を取って、相手に接触される前に、相手の反射神経を上回る速度で、例えばムエタイのような蹴り技やストレートパンチ一発で仕留めないと難しい。

一方の詠春拳は一瞬で相手に接近して無数の短打を目にも留まらぬ速さで打ち出していくカンフーで、通常、相手は防御する間もなく、リーに顔面をボコボコに殴られて、リーの勝利が決まる。

だが今回は違った。「推手」により、リーの換手による高速の連打が封じられ（換手とは相手の防御の腕を封じた上で自分の打撃を入れること）、粘り付いた腕でバランスを崩され（纏絲勁）、関節を取られてしまう。これまで接近戦で詠春拳の技が通じなかったことはなく、また、リーが映画の中で見せた、高速のフェイントで、遠くの間合いから一気に打撃を決める技が当時のリーにはなく、離れて距離を取れば、ジャックマンを攻める手立てがない。

少林拳を破るために開発されたともいわれている太極拳の動きは、知らない者にとって、野球で例えると初めてフォークボールを見たバッターのようなもので、初手合わせでその動きを見切るのは難しい。

それでも負けず嫌いのリーは攻撃を続け、無我夢中の彼には３分程度に感じた時間だが、実際は20分ともいわれ、さすがのリーもスタミナが尽きて、試合は勝ち負けなしで終了した。だが、ジャックマンが関節技や絞め技を解放せず、また発勁を使用していれば、勝負は早々に決していたはずなのである。

一方で、観戦していたリーの生徒たちは太極拳を知らない武術の素人で、パンチやキック以外は攻撃とは認識できず、リーが一方的に攻めたが、パンチすら出せず、逃げ回るのだけが上手なジャックマンを仕留め切れず残念だったと、試合を評価していた。

試合後だが、ウォン・ジャックマンは今後も当地の武術界隈で身を立ててゆく予定だったので、リーと道場主たちの関係を忖度して、試合のことは一切口外しなかった。一方、今回の事情を知らないリーは、アクション俳優としての宣伝から、ラジオ番組で北派拳法の使い手に勝ったようにもとれる発言をしたり、武術専門雑誌にも、彼はパンチもキックも出せなかったと、自分の優勢な部分だけを述べて、ジャックマンの関節技や絞め技に関して言及しない、微妙な内容を語ってしまった。

発言だけなら無視してもいいが、文章の場合は、文章で反論しておかないと、リーの話がいずれ真実となってしまう。立場上からは、沈黙を貫きたかったジャックマンだが、かなり誤解を与える内容でもあったため、地元で最も発行部数の多い中国語新聞の第一面に、リーが武術雑誌で述べた話とは異なる内容を掲載し、「ブルースリー様、もしこの内容に異議があれば、観客を入れた公開試合をして、白黒つけましょう」と提案する記事を載せた。

一方、道場の門の鍵を閉められたことに激怒していたリーも、今回の件の背景に気付いたので、自分の勇み足を穏便に収めるには、ジャックマンの提案は完全に無視するのがよいと判断した。百戦錬磨のリーが、売られたケンカを買わなかったのは今回が初めてで、前回はジャックマンに勝つ気がなかったからだと分かったのだろう。その後のリーも、彼との件は二度と語ることがなかった。

それから３年後の1967年には、前述の嫌な思い出のあるオークランドから離れて、念願のハリウッドの所在地でもあるロサンゼルスに、自身の３番目の道場を開設したのである。

自分の武術に関してもフェンシング、ボクシング、柔道、空手、ムエタイなど、多くの格闘家との交流や自らの研鑽によって、截拳道（ジークンドー）という名のオリジナルの格闘技を確立した。つまり、ブルースリーの動きは、カンフーの代名詞のように思われているが、実はジャッキーチェンやジェットリーらが演じる中国武術の動き（換手）とはかなり異なっている。その特徴を一言で言うと、太極拳に勝つための動きであり、相手に触れる「換手」ではなく、目にも留まらぬフェイントで仕留めるのだ。

さらに截拳道はケンカの達人リーの哲学（流れる水のごとく、無為自然に動く）も凝縮されており、中国武術とは違って、決まった形（套路）が存在しない。寝技ですらOKである。ちなみに最も新しい中国武術の「意拳」にも、同じく套路がない。

1968年には、再びロングビーチ国際空手選手権大会に招待されて、弟子のダン・イノサントとともに截拳道のデモンストレーションを行っている。そこでは、当時は珍しいオープンフィンガーグローブや防具をつけて、寸止めではなく実際に打撃を当てる「自由組手」を披露した。その影響なのだろうか？寸止めだったアメリカの空手の試合は、グローブを着用し実際にお互いの打撃を当てて勝敗を決める「フルコンタクト」いわゆる“キックボクシング”に近い試合へと変化していったのである。（つづく）